最弱宰相は奔走する

方位磁針

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
最弱宰相は奔走する

【Ｎコード】
Ｎ９９００Ｙ

【作者名】
方位磁針

【あらすじ】
主人公の性格は『明るい』・『強気』・『元気』というのが王道の中、『ビビリ』・『弱虫』・『すぐ泣く』魔族の少女が主人公。周りの魔族から馬鹿にされまくりな、彼女です。一応、宰相してます。でも、嫌われています。『最強』なはずなのに、この性格で上手くその要素を活かしきれません。そんな時、魔王様が人間を滅ぼす、だなんて言ってきました。大切な人を守るため、チキンながらも精一杯止めたいと思います。だがしかし、やっぱり怖い！！そんな宰相が奔走するお話です。

？（前書き）

よろしくお願いします。

？

ここは、ビフレスト。魔族が治めるアールヴヘイムの隣にある。ここを治める伯爵の敷地で二人の少年少女が戯れていた。

「エドマンドー！私と遊びやがれー」

「うわっ、ラナ！お前また来たのかよ」

肩くらいの黒い髪をなびかせ、１６・１７歳の少女が、やはり同じ年頃の金髪の少年に駆け寄る。そして、少年の背中に飛び乗るようにして、身体ごとぶつかった。そんな少女に、少年は嫌そうな顔をしながらも、ちゃんと受け止める。そんな少年の心遣いがまた嬉しいらしく、背中におぶさったまま少女はまた笑った。

「へへ、今日はアリーがアップルパイを焼くと言っていたからね！！」

「なんで、ただ食いにくるお前に、感謝しなきゃならん！」

「私は魔国の宰相だよー！？うやまえーうやまえー」

ラナと呼ばれた少女は、エドマンドという少年の背中から降り、彼の正面に立つ。ふふん、と自慢そうに胸を張った。だが、エドマンドは、ラナを胡散臭そうに見る。そして、嫌味たっぷりな笑みを浮かべた。

「ったく。今日のお勉強はどうしたのですか、宰相殿？」

「うっ！それはー、ええとー」
エドマンドの質問にラナが視線を泳がせていると、鈴をころがすような笑い声がした。
「ふふ、またお勉強抜け出してきたんでしょう？ダメよー、またユピテルさんが困ってしまうわ」
「アリー！！」
２０歳位の金色の長い髪を上品に結っている女性が、お盆を持ってラナとエドマンドに近寄る。彼らを見つめると、碧眼の瞳を、優しく細めた。焼きたてなのだろう。お盆には香ばしい匂いをさせたアップルパイが、乗ってある。
「わーい、アリーのアップルパイだー！」
「そんなに喜んでもらえて、嬉しいわ。さあ、召し上がれ？」
エドマンドは、アップルパイに飛びつくラナを、呆れたように見た。そして、諦めたようにため息をつく。ラナは切り分けられ、皿にのったアップルパイを嬉々としてアリーから受け取る。
「姉さん、そんなにラナを甘やかしちゃだめだよ」
「あら？そんなつもりは無かったんだけど・・・。ラナちゃんが可愛いから、そうなっちゃうのかしら」
アリーは頬に手を当てた。ラナと目が合うと、ふんわりと微笑む。
「えへへへへー」
ラナは照れたように、頬を赤めた。

アリーはとっても心根の優しい女性だ。弟のエドマンドと同様光沢を放つ金髪をなびかせ、おだやかにいつも笑っているアリーは、ラナの憧れだ。ラナはいつかこんな女性になりたいと思っていたし、こんなお姉ちゃんが欲しいなーとも考えていた。

「・・・『可愛い』ねぇ？」

エドマンドは、ジロジロとラナを見てくる。何か言いたげな視線に、アップルパイにかぶり付いていたラナは、ムッとした。

「何だよ、その目」

「いやー？ただ、もう少し乙女らしい行動ができんのかなーと思いまして」

「なにさー！」

ムキーと手を振り上げて怒るラナを見て、エドマンドがニヤニヤと笑う。そんな二人の攻防戦をアリーが「まあまあ」と言いながらも、おだやかに見守る。

こんな、暖かいこの空気がラナは大好きだ。

――――魔国では、こんなことは無いから。

「ラナ様〜〜〜〜〜〜！！探しましたよ！また、こんなところに居たのですか」

そう言って、ほんわかした空気に飛び込んできたのは、白く小さい姿をした竜。黒いつぶらな瞳は、今は怒ったように細められている。竜の姿をみると、ラナは隠さずに嫌そうな顔をした。

「げっ！もう来たの？」

「『げっ』とは何ですか！久しぶりに『私がお茶を入れてあげる、ユピテル』と可愛く言って下さったから、感動しむせび泣きながら飲んだのに！痺れ薬を入れたでしょ！ラナ様！！ユピテルは悲しゅうございます！」

「そうだっけ？」

小さな瞳から、涙を滂沱と流す竜。いつものことなので、ラナは軽く無視をして構わずアップルパイを口に放り込んだ。ユピテルは、ラナのお目付け役である。だが、事あるごとに五月蝿いので、ラナはよく煙たがっていた。

「ラナ様――――！！！」

「うるさいなぁ」

「うっ、うっ、ユピテルめは、ユピテルめは、ラナ様に立派な宰相になっていただきたい、と日々願っているのです。なのに、なのに、お勉強サボるなんてーーー！！！」

「勉強嫌い」

「そんなこと言わずに！」

「イ・ヤ」

「そんな～」

ユピテルは、パタパタと羽を忙しなく動かし、ラナの周りを飛び回った。なんとか、主人を勉強させようと必死なのだ。だが、ラナはそんな彼など知るもんか、とばかりの態度だ。
さすがにラナにまったく相手にされないユピテルが不憫に思ったのか、エドマンドは仕方なしにラナを説得してきた。

「おい、ラナ。今日はそのアップルパイ食べたら、帰れよ？俺もこのあと学びがあるしな」

「えーーーー！？」

「ラナちゃん、その残りのアップルパイお土産に包んであげるわ」

「本当？ありがとう！」

ラナは不服そうにしたが、アリーの言葉に顔を輝かせる。
何となく、二人に丸め込まれてしまった感じはする。もう少しここに居たかったが、二人にそう言われたならしょうがない。ラナは食べていたアップルパイをほお張り、帰る準備をした。

∞∞∞

「ちぇ！もっと遊びたかったのに～」
ラナは、ユピテルにぶら下がりながら、毒づいた。３０センチ程の大きさの竜のユピテルだが、魔族であるため以外に力持ちだ。ラナをこうして脚につかまらせ跳ぶのは朝飯まえなのだ。ラナとユピテルは己の領にある城に帰るべく、空をぷかぷかと飛んでいた。

「まだ、そんなことを言う。しっかりとアップルパイ貰ってきたのですから、良いではありませんか」
ラナの腕の中には、しっかりと貰ったアップルパイの包みが抱えられていた。ちゃっかりとほとんどのアップルパイを持ち帰るラナを、ユピテルは呆れた様に見た。しかし、ラナは不完全燃焼のようで、口を尖らせる。

「アップルパイ食べて、遊びたかったの！最近あんまりエドマンド構ってくれないし・・・」

「まあ、彼も伯爵の子ですからね、いろいろ忙しくなっているのでしょう」

「ブーーー」

「それに、ラナ様だって、本当は宰相のお勉強しなくてはいけないんですよ！」

「うぐっ！」

「いい機会です。エドマンドも伯爵の息子として頑張っているのですから、ラナ様も見習いなさい」

「ふぐぅ」

また始まったユピテルのお説教に、ラナはほっぺを膨らませた。ユピテルの説教は始まると、長いのだ。しかも、今はユピテルの脚につかまって飛んでいるので、どこへも逃げようが無い。ラナはくどくどと展開する説教を首をすくめて、聞くしかなかった。

説教が終わると、ラナは安堵のため息をつく。ユピテルは満足したように、羽を動かした。ラナは彼に元気を奪われた心地だ。己の城が見えてきて、視線が自然と城へ向かう。

ユピテルはそんなラナを気まずげに見た。一瞬ためらうようにした後、重々しく口を開く。

「・・・それと、ラナ様。明日は魔国で会議があります。朝一番で出かけるので、準備してくださいね？」

先ほどのお説教口調をあらためて、ユピテルは静かに話した。視線は城がある方向を向いているが、ラナを気にしている気配が伺えた。

「分かった」

ラナも神妙に頷いた。やはり、視線は城に向いたままだ。ユピテルがどうして口調をあらためて、ラナに明日のことを伝えたのか、分かっているからだ。

宰相であるラナは、当然魔国の会議に出席することになる。だけど、ラナの存在は無に等しいものであり、嘲笑の的だからだ。

――何故なら、ラナは『最弱宰相』なのだから――――

？

「――――ということで、アリカヤの地にいる魔族の統制は、４武将の一人クロノスに任せることにする。異論は無いな？」

それだけで存在感がある紅の長い髪と瞳を持つ、魔王は今回の会議で決まったことを述べた。魔王の名はソル。伝説の存在となっている『白い恐怖』とも呼ばれた先代の魔王の地位を受け継いだ豪傑だ。

彼は、カリスマ性に溢れ魔王の地位に納まると、先代の魔王が居なくなり統制がとれなかった魔族を一気にまとめてしまった。もはや、魔族らの絶対的な存在である。いかんせん、王という気質のせいか傲慢な態度が目立つが、それもまた彼の魅力と、彼を慕う魔族は多い。

「カイルス、お前はどうだ？」

「意義ありません」

「ヴィクトリア、お前は？」

「ありませんわ」

「ディス」

「ないですよ」

順々に、会議に集まった者たちに王が、異議がないか確認していく。ラナは、いつ魔王様が自分に確認してくるか、待った。

「クラピ、お前は？」

「皆さん、同様にありません」

「そうか。では、全員異議なしということで、今回の議題は終わりとする」

従順に返事をする部下たち。ソルは、満足そうに頷いた。

（・・・・うん。私確認されなかったよね？飛ばされたよね？全員異議なしじゃないから、一人異議なしかどうか聞かれてない人いますからっ！！）

己の名前を呼ばれなかったことに戸惑うラナが魔王様を見ていると、くすくすと忍び笑いが聞こえた。そこで初めて、このことがわざとされたことだと、気付く。思わず、笑い声がした方向を見ると、四武将の一人であるヴィクトリアが扇で口元を隠している。目が合うと、馬鹿にした笑みを浮かべてきた。

（あー、またか）

ラナは目を伏せた。

このようなことは初めてではない。一応、ラナは宰相という地位にいるが、魔族のほとんどがラナに敬意なんてはらうことなんてないし、認めていない。宰相という地位は代々ラナの一族が受けついてきたが、もはやその中身は伴っていないのだ。
だから、『最弱宰相』と呼ばれ、馬鹿にされている。裏でこそこそと悪口なんて言われない。もはや堂々とラナを目の前にして、悪口を言ってくるレベルだ。

この原因は、ラナの家系、スヴァルト・アールヴヘイムにある。ラナの先祖はもともと人間に親善派なのだ。何かと、魔族が人間を滅ぼそうとするたびに、阻止してきた。そんなラナたちの存在は、人間を家畜並みに考える魔族たちにとっては、目の上のたんこぶのような存在なのだ。

そして、もう一つの原因はラナの性格だ。

何を隠そう、ラナはとてもビビリな性格なのである。力がすべての魔族の中で、チキン丸出しで魔力も微弱にしかないラナは、魔族たちにとって嘲笑の的だった。
宰相という肩書きは立派なラナは、魔族たちにとって汚点のような扱いをされている。

実際今も魔王ソルは何気ない顔をして、ラナを無視し続けていた。無言のラナへの制裁なのだろう。彼からはラナを毛嫌いしているのが、いつも感じられた。何かとラナを排除しようとしてきた。暴力的なことをするわけではないが、ちくちくとした嫌がらせを仕向けてくるのだ。おそらく、ラナが自主的に宰相の地位を降りることを望んでいるのだろう。

「よし、会議は終了だ」

ソルの一声が、解散を告げる。ラナは強張った肩を降ろす。とりあえず、絶えず嘲笑される苦痛から解放たれるのだ。各々が立ち上がり、己の仕事場へと向かう。ラナものろのろとした動きで、椅子から立ち上がる。ユピテルが待合室で待機している。待合室に行って、ユピテルとさっさと己の家に帰りたい。
今日の会議もしっかりと、馬鹿にされたラナは、トボトボと会議室から出た。

「ラナ様」

ドアを出て気を抜いた瞬間に、誰かに声を背中越しにかけられる。思わず、びくりと身体がふるえた。呼び止めた相手を見るべく、恐る恐る振り返る。本能では、見るな、と叫んでいた。呼び止めた声の持ち主は、何となく予想がついていた。それが的中していれば、ラナにとってその者は、特に苦手とする相手のはずだ。嫌々後ろを振り返ると、灰色の髪の温和な笑みを浮かべる美しい青年が立っていた。

「ラナ殿、本日の会議はあまり元気がないようでしたが、どうかしましたか？」

そう心配そうに聞いてくる奴は、四武将のディスだ。四武将とは、魔族の中でもひと際強い４名の武将の総称である。特に、目の前にいるディスは、温和な見た目とは逆に残忍な性格として知られる。

言葉だけ見ると、とてもいい奴に感じるかもしれないが、騙されてはいけない。よく彼を見ると、灰色の瞳には嘲笑がにじんでおり、口元は歪んだ笑みをつくっている。とても、心配しているとは思えない。
一見、爽やかに笑う美しい青年のようだが、腹の中は真っ黒だ。この青年は何かと、ラナを貶めようとする、油断ならない魔族の青年なのだ。

「い、いえ、大丈夫です。御心配おかけしました」

呟くように、ラナは話した。
理由は簡単。彼が怖いからだ。
見た目がやさしげなのに、放つオーラが禍々しいギャップが、何か秘めていそうで恐ろしい。思わず、びくびくとした態度になってしまう。ディスを正視できなく、下を向く。

「それは、良かった！宰相ともあろうお方に、倒れられたらこの魔国はやっていけませんからね」

（はい、嫌味。会議で何もできない私への嫌味ですね、それ）

清清しい笑顔で、言っているが、完全に役に立たないラナへの皮肉だ。そのことをちくちくと責めてくる。直接ではなく遠回しに、丁寧に言ってくるものだから尚始末が悪い。

「そ、それほどでも」

「またまた、ご謙遜を」

二人の話している姿は一見、笑顔な宰相と慇懃な態度の武将の会話かもしれない。だが、宰相のラナは冷や汗を流しながら、ディスは嘲りを口に含ませている。

ドクッドクッ！！

心臓の音が大きく鳴るのが、自分でも分かる。手に汗が滲む。手どころか身体全体がふるえてくるのを、どうしても止められない。手をぎゅっと握るも変わらない。早くここから去りたかった。ディスという恐ろしい存在の近くから、一刻も早く逃げたい。

「っでは、ここで失礼します！」

「はい、また」

早口でラナは、別れの挨拶を言った。思いのほかディスはあっさりとラナを解放する。やっと、ねちねちと攻撃してくるディスを振り払うことが出来た。ラナはそっとため息をついた。ディスに背中を向ける。そのまま歩き始める。その時後ろからディスの「さようなら、『宰相』様？」という声が聞こえた。

（・・・やっぱり、あいつは苦手だ）

ラナは、唇を噛む。が、何も言い帰さず、トボトボ回廊を歩き始めた。そんなラナをじっとディスは見ていた。口元を弧に描いて。

？

「なんだ、お前あのへっぴりに興味あるのか？趣味悪ぃな」

ソルはディスにニヤニヤと笑いながら、話しかける。紅色の瞳は、獰猛さを宿している。褐色の肌をした屈強な体つきからは、彼の強さがうかがい知れた。少し己より背が高い魔王を見て、ディスは微笑んだ。

「僕、弱いもので遊ぶのが好きなんです。ほら、壊れるか、壊れないかのスリルが楽しいでしょ？」

「そんなもんかねー？俺は強いものを壊した方が、やりがいがあると思うがな」

「ふふっ。まあ、それぞれですから。それに、あの宰相殿は、特に弱い。じわじわと苦しめていくのが、おもしろいのですよ」

ディスはくすくす笑いながら、ラナが歩いた回廊を見た。もう、ラナは見えなくなっていたが、彼には見えるとでもいうように。灰色の瞳に残虐さをともして。

∞∞∞

ラナは、鬱々とした気分を持て余しながら、ゆっくりと回廊を歩いていた。気分は、最悪である。会議ではいつもであるが無視されるし、最後までディスにからかわれた。

スッ―

スラッとした長身に見合う長い足で誰かが、ぽてぽてと歩くラナをすぐに抜かしていった。カイルスだった。ラナを抜かす間際、カイルスと目があった。アッシュグレーの瞳に映っているのはラナに対しての『無関心』だった。絹のような美しい薄い水色の髪をなびかせ、カイルスはすぐに先に行ってしまった。

氷のような冷たい美貌の彼は、ラナと同じ宰相という地位にいる。この魔国では、宰相は二人いるのだ。彼はラナと同様、宰相という役柄につく一族の者である。ラナと決定的に違うのは、彼がとても優秀であり、魔族たちや魔王の信頼が厚い、という点だろう。

カイルスは、ラナに対してディス達のようなことは何もしてこない。代わりに、彼はラナ何の関心も抱いていない。というよりも、ラナが存在しないように、徹底的に無視を貫いている。彼にとっては、同じ宰相に就任している役立たずのラナが、見るに耐えられないのだろう。

（愚弄されるのと、無視されるのとどちらが良いのかな）

ラナは、カイルスの遠ざかる背中を見ながら考えた。

「おい、最弱宰相様のお通りだぜ？」

「ったく、早く消えないかな」

「見苦しいったら、ありゃしないわ」

ひたすらユピテルがいる待合室までの回廊を歩いている間、魔族たちの声が聞こえる。途中すれ違う魔族たちは、ラナへの蔑みの視線を隠そうともしない。普通、宰相という地位に居る者にならば、お辞儀の一つもするはずだろうが、それもない。ただ、小声でラナをせせら笑う。

ラナは、下向きに歩いた。エドマンドやアリーに会いたい。あの温かな空気の中に早く行きたい。ぼんやりと思いながら。

（早く、帰りたい）

ラナは早歩きになるのを、止められなかった。待合室が見えてくる。待合室のドアを開くと、ユピテルが心配そうにしながら待っていた。せわしなく部屋の中を飛び回っている。ドアを開けたラナを見ると、ユピテルはぴきっと固まった。羽ばたきまで止まったので、とすん、床に小さな身体が落っこちる。だが、視線はラナに向けたままだ。ラナの顔色があまり良くないのを見て、何があったのか察したようだ。

「ラナ様・・・」

「ユピテル、帰ろう。会議は終ったよ」

ラナはユピテルの言葉をさえぎった。こんなのいつものことだ。皆

に馬鹿にされることは、なんてことはない。
笑顔を作って、ユピテルを見たが、上手くできていない気がする。

「はい」
何か言いたそうな顔したが、ユピテルは何も言わずに頷いた。

待合室を出て、城の屋外に出る。そこを守っていた兵士たちが、意味深にラナを眺めてくるも何も言わなかった。飛んでいたユピテルが、振り返りラナにつかまって、とばかりに脚を出す。ラナはユピテルの脚をつかんだ。ふわり、とラナの身体が浮く。そのまま上昇していく。感じるのは、風と冷ややかな視線。ラナは無言で城を離れた。

∞∞∞

魔国を離れ、1時間ほどがたった。ラナたちはまだ飛んでいた。もう、時刻は夕方で、目の前には赤い夕焼けが広がっている。ユピテルは明るい声で、ラナにひっきりなしに話しかけた。

「今日の夕食は、タイロンが腕によりをかけたビーフステーキだそうです。デザートはチョコレートケーキですって。きっと、美味しいですよ！」

「うん」

「シェリーが夜にトランプゲームをしよう、と言っていました。私とフリッグも混ざります。楽しみですねー！」

「うん」

「あ、明日は午前だけのお勉強にして、午後はピクニックに行きましょう！今日は頑張りましたから、御褒美です」

「うん」

ラナは、魔族たちの自分の扱いにへこみ、他のことはあまり考えられない。ぼんやりと返事をする。ユピテルは、ラナを元気付けるのを諦めたのか、黙り込む。そして、ポツリと話す。

「・・・ラナ様、夕焼けがとても綺麗ですね。きっと、明日はいいことがありますよ？」

ユピテルは眩しそうに、目の前の夕焼けを見た。ラナもつられて、まじまじと夕焼けをみる。

広大な空の下には、大草原が広がっている。太陽はこれから沈むというのに、なんだか日中には無い力強さが感じられた。まだまだ、これからだ、とでも言うように。

「そうだね」

ラナはそっと目を閉じた。目を閉じても、真っ赤な夕焼けが強く強

く感じられた。まるで、ラナに『これからだ』と元気付けるように。

？

宰相であるラナの朝は、早い。ラナは本当はもっと寝ていたいのだが、周りがそうは問屋がおろさない。

「ラナ様〜〜〜〜！！朝です、起きてくださいな！」

そう言って、ラナにかけられた毛布を剥ぎ取ってきたのは、メイドのシェリーだ。カールした亜麻色の髪をひとつにくくり、ぼんきゅっぼんな体系は、実に羨ましいとラナは思う。
陶器のような白い肌に、少しつりあがったアーモンド形のエメラルドグリーンの瞳である彼女は、どっからどう見ても、美女だ。
だが、色っぽい見た目に反して、中身は男らしい性格だったりする。

「うーあと、５時間・・・」

「そんなに寝て、どうするんですか！さあさ、早くベットから出てください。シーツが洗えないでしょ？」

「むーー」
ラナは、目をこすりながら、緩慢な動作で起きた。

「早いよぅ、シェリー」

「いつもの起きる時間ですよ。また、昨日夜更かししてたでしょう？お部屋から光が夜遅くまで漏れていたのは、知っていますよ！？」
そう言って、腰に手を当てて怒るシェリー。胸をはる姿勢になるの

で、自然と大きい胸が誇張される。

「えいっ！」

堪らずポスンと音をたてて、ラナはシェリーの豊満な胸に顔を埋めた。

（う～ん。いい匂いと柔らかな感触が、たまらない！）

ラナはそういう趣味はない。ただ、彼女の魅力的な胸は、誰だって触りたいと思うはず！とラナは言い訳をしている。

時々、シェリーに抱きついたりしているが、シェリーは構わずラナをぶら下げたまま掃除や洗濯などのメイドとしての仕事を着々とこなす。小柄なラナは、コアラのように彼女にひっつくのが大好きだ。小さい時から、母はよく放浪の旅に出て行ってしまうので、寂しい時はシェリーに温もりを求めたものだ。彼女はラナにとって、母や姉のような存在でもある。

以前ラナはこのことをエドマンドに話したところ、彼は非常に羨ましがっていた。

今日も、胸にラナの顔をうもれさせたままシェリーは、構わずシーツなどをはがし、洗濯籠に入れた。そのまま張り付くラナを洗面所に連れて行き、ラナの身支度をさっさとさせてしまった。

いろいろ見事なメイドだ。

シェリーにせっつかれてダイニングルームに行くと、既にユピテル

とコックのタイロンが待っていた。強面でかつ牛のような角を頭から生やし、巨大な体躯を持つ彼だが、作る料理は見た目も味も繊細なのだから、世の中不思議である。

「ラナ様、本日の朝食はラナ様のお好きなスクランブルエッグやスコーン、野菜スープにデザートはいちごですよ」

そう言うタイロンの笑みは、どう見ても凶悪犯罪者が悪業を思いついた時の笑みにしか見えない。実際は、一番涙もろい優しい性格なのだから、不憫な奴だとラナは思う。

「はーい」
ラナは、席についた。

「いただきまーす」
食事の挨拶を元気にして、ラナはさっそく食事にありついた。

「おーいしー！！」

タイロンのつくる料理はとても、美味しい。アリーも料理上手だが、やはりタイロンが一番上手だ。アップルパイはアリーの作ったのが、ダントツだが。

幸せそうに食べるラナをこの城に仕える魔族たちは、暖かく見てくれている。エドマンド達も大好きだけど、ラナはこの城の皆も大好きなのだ。

「ラナ様、本日は宰相としての礼儀作法を学びますからね？」

「はーい」

勉強は嫌だが、朝食がおいしいので良しとしよう。ラナは満足げに頷いた。だが、ラナはすっかり忘れていた。ユピテルが施す学びを厳しさを。

∞∞∞

「ラナ様、背筋はしっかりと伸ばして！！手先まで意識して！」

ユピテルは、意外に作法には厳しかった。さっきから、細かいミスにまで叱責がとぶ。ラナは、ひーひー言いながら、ユピテルの作法の学びを受けた。少しでも気を抜こうものなら、鞭がとんでくるのだから、ひどい。

（うわーん！鞭が怖いよぅ！）

ラナは、歯軋りした。だが、ユピテルの持っている鞭が怖いので、逆襲はできない。

ラナが、ユピテルのスパルタレッスンを受けていると、「失礼します」と部屋にフリッグが入ってきた。フリッグは、この城の庭師だ。彼は、おっとりした性格で、とても植物が好きだ。ちなみに彼の専用の庭には珍しい植物がたくさん植えられている。以前ラナが、見に行って人食い花に襲われて以来、もう絶対近づくものかと、ラナは誓っている。

「ラナ様にお客様です」
いつも穏やかな彼が、今はすこし焦ったような表情だ。
それだけで、来たお客というものが良くないものだと、分かる。

「ええと、誰が来たの？」
ラナは恐る恐る質問する。そんなラナを気の毒そうに、フリッグは見た。

「四武将のヴィクトリア様とクロノス様です」

「・・・体調が悪いので、会えませんと伝えて」

「ダメです」

逃げようとしたラナの意見をユピテルは、一刀両断した。

？

ドアに走って、脱走しようとしたラナを、無情にもフリッグがラナの両脇を捉えて、捕まえてしまう。フリッグは申し訳なさそうに、糸目の目尻を下げた。

「すみません、ラナ様。ですが、お会いしたほうが、よろしいかと・・・」

「会いたくない！！だって怖いようっ！」

ラナは泣き声で、抗議する。ユピテルは、容赦なく言い放った。

「しょうがありませんよ。来られてしまったのであれば、一族の長らしく対応しませんと。またなめられてしまいますっ！！」

「もう、既になめられている気もしますがね」

「フリッグ、黙りなさいっ！」

フリッグは、涙目になっている主を眺めて、苦笑した。「嫌だ嫌だ」と来客者に会うのを渋るのは、ひとえに小心者の為、来客者に畏怖しているからだ。魔族の虐めに泣き、弱虫な態度の主を見下し、また魔族たちがラナに辛く当たる、という悪循環が繰り返されている。

ユピテルらは逃げ腰になり、行きたくない、怖い、と喚くラナを客間まで引きずっていった。ドアからは、二人の強い魔力がビシビシ感じられる。その魔力の強さにビビって、また泣きそうになるラナ。だが、いつまでも二人を待たせて、機嫌を損ねられても、怖い。観

念したラナは、客間のドアを開いた。中にいたヴィクトリアとクロノスが一斉にラナに視線を向ける。

「あら、ラナ様。お邪魔しておりますわ」

膝丈のスカートの端を持ち上げ、礼をする。

そう言って、勝気な笑顔で笑うのは、ヴィクトリアである。四武将唯一女性の彼女は、意外に攻撃的らしい。銀色の髪をツインテールにし、短いスカートを履き、いつも日傘をもつ彼女は一部の魔族たちに大変人気だと聞く。ルビー色の瞳は、ラナを見下した色をにじませているのがありありと伺える。

「・・・失礼する」

もう一人、寡黙な印象を受ける青年は、クロノス。背が高くがっしりとした体型ながらも、暑苦しいところはない。茶色の短髪は精悍な顔によく似合っている。

「わ、わがミーミル城へようこそようこそ、おいでいただきました」

ラナは背筋を伸ばして、挨拶した。だが、語尾がふるえてしまうのは、どうしようもない。

「ミーミル『城』ねぇ・・・。ここへ参る時、周囲を見回したしましたが、どう見てもここはお城には見えにくいですわね」

「あはははは・・・」

「それに、兵もいないなんて！ここはどうなっておりますの！？」

ラナはヴィクトリアのキツイ質問に、乾いた笑いで返した。ヴィク

トリアの言うとおり、ラナ一族であるスヴァルト・アールヴヘイムのかまえる家宅は、城と呼ぶにはいささか小さい造りだ。館と呼んだほうがいいかもしれない。普通、魔族の構える城は、堅固である。だが、レンガ作りで、フリッグが植えた草花があちこちを彩っている様は、威厳といった類のものはまず感じないだろう。きっとこの館を見る者は、先に可愛らしさとかオシャレな印象を受けるに違いない。堅固さはまったくない。しかも、兵士といったものはいない。何故なら、ここにはラナと数人の使用人しかいないからだ。

「す、すみません」

「まあ、ラナ様らしいですが」
ヴィクトリアは鼻で笑った。

「・・・あのー、それで用件は何でしょうか」

ラナは、慎重に二人に聞いた。
遊びに来ました、なんてことは絶対にない。
悲しいことに、ラナと親しくする魔族なんて、この城に居る魔族以外いないからだ。
というか、魔族に友達はいない。そんなことを考えていると、だんだんラナは悲しくなった。

「ええ。次の会議の日程が決まりましたので、お知らせに参りましたの」

「そうですか。ありがとうございます。御足労をかけたようですね。書簡でもよろしかったのに」

書簡は、魔術式が記された専用の台を通して、送られてくる。術式が円を描かれていて、術式が囲っている真ん中から、書簡を送ったり受けたりするのだ。ラナに送られてくる魔国からの書簡は、適当に会議のある日時だけを乱暴に書かれたものが、いつもおざなりに送られてきていた。いつもなら、挨拶文などない書簡が送られてくるはずなのに。ラナは、彼らを訝しんだ。

「いえね、近くに用事があったものですから、ついでに参りましたのよ」

そう言って、ヴィクトリアは意味深に笑った。瞳と同じルビー色の口紅をひいた口元が弧を描く。

「用事・・・ですか？」

「ええ。人間どもが浅はかにも、我ら魔族に反抗した地域がありまして、粛清に行ってきたのですわ」

ラナは、頭が真白になった。

（しゅくせい・・・？）

「何を・・・したのです？」

喉がカラカラになっている。声がかすれた。

「何、愚かな人間どもを半殺しにしたまで」

少し、散歩しにいきました、というような軽いノリで言われた。

「ふふ、本当に人間は脆弱な生き物のですわ。強い者がすべてなのです。弱い者は生きる資格などない。せめて、強者にへりくだって、いればいいものを」

（なんで、そんな風にいうの？）

ラナの唇がわななく。

「本当は、半殺しなんて半端なことをしたくはなかったのですが、脅しのためには一応生かしておいた方が、効果的だと判断しましたの」

（簡単に、殺すなんて）

「ああ」

そこで、ヴィクトリアはわざとらしく、青白くなっているラナを見た。

「そういえば、ラナ様は人間どもに親善派なのでしたね？失礼しましたわぁ」

そう言って、笑うヴィクトリアを見て、ラナは気付いた。

ヴィクトリアらは、人間を擁護するラナに嫌がらせするために、あえて人間をいたぶった後に来たのだ、と。

ラナの体がふるえた。

なんということを、したのか。人間だって、魔族と同じ心があり、生きている存在なんだ。命に魔族も人間のない。どちらも貴重な命だ。なのに、平然と「殺す」などと語るヴィクトリアに恐怖も感じる。彼らにとって、命などそんな程度のものなのだろう。

（怖い・・・！）

魔族に対する畏怖が、ラナを襲う。何でもないように、命を奪ってしまうような相手と一緒にいたくなかった。必死に体のふるえを抑えようとするラナをみて、ヴィクトリアは満足げに笑った。クロノスは興味がないのか、無表情にヴォクトリアの隣りで佇んでいる。

（こいつら腐ってる）

彼らに対する怒りもある。だが、それを口にする勇気はなかった。

「あら、ラナ様そんなにふるえてどうしましたの？か弱いラナ様には、血なまぐさいお話しでしたかもしれませんね。ごめんなさい。それなら、私たちはもうお暇しますわね？」

ふるえるラナを見て、ヴィクトリアは満足したらしい。ラナへの嫌がらせという目的を果たしたヴィクトリアらは、さっさと帰ることにしたようだ。

「会議は、次の満月の翌日ですわ。時刻はいつも通りです。では、また魔国城でお会いしましょう」

優雅にヴィクトリアは礼をした。クロノスも彼女に合わせ、目礼を

する。
ヴィクトリアは背中から紅の羽を出し、クロノスは茶色で巨大な翼を出して浮かびあがった。彼らの後ろに、黒い渦生まれる。
ヴィクトリアはそこで、思い出したように笑った。
「あ、そうそう。弱い者が生きる資格なんてない、というのは魔族でもそうなのですわよ？」
それは、冷たい笑みだ。
「例え、宰相様だとしても、ね」
そう、彼女は言い残し、クロノスと共に渦をくぐる。一瞬で、二人は消えていた。冷たい風が、ラナの頬を撫でる。

ラナは、握り締めていた手をだらりと下げた。その時初めて、己が手のひらをきつく握りしめていたことに、やっと気づく。
「ラナ様・・・」
部屋の隅に控えていたフリッグがそっと、ラナの背中をさする。ユピテルも飛んできてラナを正面で心配そうに見る。
「大丈夫」
ラナは、ユピテル達を安心させる為に、無理やり笑った。

?

今日は、このビフレスト領ではちょっとしたお祭りがある。

選ばれた数人の乙女が町のなかを練り歩き、花びらをまく、というだけのものなのだが、お祭りは魔国には無い習慣なので、ラナの毎年楽しみにしている行事の一つだ。数々の出店、また曲芸や奇術をする見世物が並び、町全体がにぎわう雰囲気がとても、わくわくするのだ。この日は、皆開放的になり、笑顔で知らない人にも挨拶する。

「エドマンド！あのお店行こう！」

「また、食いもんじゃねーかよ！お前どんだけ食うんだ！？」

この町の人と同様、ラナも開放的な雰囲気を満喫していた。さっきからエドマンドを引きずって、数件食べ物の出店をまわっては、買い食いしている。

「ふふん！乙女の胃袋はブラックホールなのだよ」

ラナが、チッチと指を振りながら言うと、エドマンドは

「お前だけだろう？」

と呟く。ラナは無言でデコピンをお見舞いしてやった。

「アリーも来ればよかったのに」

「姉さんは、プラムさんとまわるからな」

「プラムの奴めっ！」

「おいおい」

エドマンドは呆れたように、笑った。

プラムはアリーの婚約者だ。すぐに、というわけではないらしいが、いつか二人は結婚するのだろう。

ラナはなんだか、姉を奪われた気がして、気に食わない。

「祝福あれー、祝福あれー！！」

ラナが唸っていると、花びらをまく乙女達の一団が近づいてきた。

ラナとそう変わらない年代の少女たちは、綺麗におめかしされて、頬を染めながら花びらを一生懸命まいていた。

可愛らしい声で「祝福あれ」と言いながら、花びらをまく初々しい少女の姿は見る者を笑顔にさせる。

「いいなー。私もあれしたいな」

「花びらまく乙女？」

「うん！」

「ぶふっ！」

「何で笑う！！？？」

乙女の夢を笑うなんてっ！ラナはしばらく、すねていた。何も話さず、頬を膨らませて歩くラナ。そんなラナを見かねて、わるいわるい、とエドマンドはクレープを奢った。

二人は小さい頃からつるんでいる。怒ったとしても、相手が何をすれば喜ぶかは心得ている。エドマンドの思惑通り、ラナは「しょうがないから、大目にみてやる！」とクレーズを美味しそうに頬張った。その後も、出店や見世物を楽しんだ二人は、夕飯代わりの野菜を挟んだパンを買い、公園に行った。

公園の芝生に座って食べていると、夕日が沈み、花火が次々と打ち上げられた。

「エドガマンド！今の花火凄かったね！！花の形をしていたよ！？」

「ああ、そうだなー」

すっかり、はしゃぐラナ。エドマンドは、静かに花火に感銘する。いろんなことに騒いでは目を輝かすラナと、そんなラナにつれられて相槌をうつエドマンド。いつもラナがエドガマンドをつれまわしては、二人で様々な遊びをした。この二人の関係は、小さい頃から変わらない。ラナがエドマンドにもつ意識は、家族のようなもので、男女間のものにはならないだろう。きっと、エドマンドもだ。ビビリなラナだったが、エドマンドやアリーだけは怖がった事は無い。

花火に見入っていると、隣りにいるエドマンドが話しかけてきた。

「ラナ。・・・お前、最近どうだ？」

「最近？」

ラナはいきなりの話題に思わずエドマンドをみたが、エドマンドは、ラナを見ないで視線は花火に向けられたままだ。

「おう。仕事とか」

「・・・・・・・」

あまり、宰相としての仕事のこと、ラナの待遇はエドマンドには話してない。だから、かえってエドマンドが何を聞きたいのか、思いあぐねた。

そんなラナにかまわず、エドマンドは話し続けた。

「お前がさ、先代様のあとを継いで宰相になったばかりのころ、お前スゲー暗い顔色だったんだぜ？」

気付かなかったか？と笑うエドマンドは、やはりラナを見ない。

「今はそんなことは無いけど、時々不安そうに考え込む時がある。なんでもないように振舞っていたけど、お前顔に出やすいからな！モロバレだったぞ。姉さんだって、気付いてたぜ、あれ」

「エドマンド・・・」

ラナは、上手く話せなかった。

「日に日に暗くなるお前を見て、何もできない不甲斐なさとか感じるときもあってさ、一時期スゲーむかついた時もあった。お前は全然そういうこと話さないし。でも、お前が一生懸命戦っていたのは

感じたから、何も言わなかった」

「うん」

「今でも、俺は何もしてあげられねーけどさ、

――――――俺はお前の味方だ」

「・・・うん」

喉がひくつく。いつのまにか、目から涙が流れていた。嗚咽が時々漏れてしまう。エドマンドはやっぱり、ラナを見ない。それが、泣き顔を見られるのが嫌な意地っ張りなラナへの配慮なのだと、気付いた。エドマンドは優しく微笑んだまま、花火を見続ける。

宰相になって、魔族たちから見下される日々。とても、辛くてユピテル達には、魔国城にいきたくない、とゴネたこともあった。魔族たちから嘲笑されるたび、胸が酷く痛んだ。今だって、本当は辛いのだ。

でも、エドマンドにはそんな姿見せたくなかった。彼も伯爵の子として、大変なこともあるのに頑張っているのが分かったから、自分も頑張ろうと思えたのだ。エドマンドだけとは、同等にいたかった。

でも、エドマンドは味方だと言ってくれた。それだけで、今までのラナの頑張りが救われたような気がした。

花火が打ち上げられる度に、周囲からは歓声があがる。
人々は終始笑顔で、見ているこっちが幸せをもらった気分になる。

母親が7、8歳位の娘と手をつなぎ、花火に歓声をあげる娘を愛しそうに見ている。老夫婦は公園のベンチに座り、楽しそうに話している。若い恋人が、お互いに頬を染めて手をつないで歩いている。

この風景のすべてが、ラナには苦しいほど大切だ。
少しとして、失くしたくない。
こんな世界を壊したくない。

ラナはそっと目を閉じた。
魔族たちは容赦なく、この世界をぶち壊そうとしてくる。
でも、絶対に守ってみせる。ラナは強く決心した。
ラナの近くで、一陣の風が舞った。

?

『いい？誰にも優しくしなきゃだめよ？』
そう人指し指を立て言うのは、ラナの母であるユノだ。
ラナと同じ黒髪黒目の母は、いつもラナのあこがれだった。
『忍耐強くありなさい。すぐに怒ってはだめよ』
よくユノは、小さいラナを旅に同伴させ、いく先々で稽古をつけてくれた。その時、ユノはいつもこのことを繰り返すようにラナに伝えたのだ。
懐かしい姿のユノは、さらに話を続けた。
『でもね、どうしても怒らなくてはいけない時は、――――』

パチリと目が覚ました。昔の夢をみていたらしい。とても懐かしい。
ラナは、ベットの中で横たわり夢の余韻をしばらく味わった。

母は、ラナが１０歳の時に、ラナを置いて旅に出かけてしまった。
それまでは旅に一緒に連れて行ってくれていたのに、ぱったりと姿を現わさなくなった母。最初は寂しくて、泣いていたが、ユピテル達がなぐさめてくれ、今では母のことを思い出すと『悲しい』というより『懐かしい』という思いになる。

ラナは、大きく伸びをする。そして、着替えるべく、ベッドから出た。

魔国城での会議の日、いつもより早く起きたラナをシェリーは心配した。
いつもならシェリーに叩き起こされているのに、今日は一人で起きたからからだ。

「な、何か、悪いものを拾い食いしましたか！？」

「食べてないよ！失礼な。私だって起きるときは、一人で起きれるんだから！」
しきりに心配するシェリー。いつもとは逆にラナが、尚もおかしいとラナにすがりつき引き下がらないシェリーを引きずる。

「何言っているんですか！そんなこと今までありませんでしたわ！？は！きっと、ラナ様に何かが取り付いたとか・・・！」

「何だよっ！起きちゃいけないのかよー！！」

ずるずると、腰に手をまわすシェリーを連れて、ダイニングルームに向う。ダイニングルームに着くと、食事の用意は既にされている。タイロン特製ホットケーキを急いで、たくさん胃袋に入れる。魔国城までは遠い為、早くにここを出なくてはならない。朝ごはんを掻き込み、ラナは魔国城に行くべく支度を万全に整えた。

「よっしゃぁ！！行くぞーーー！！」

乙女らしからぬ、雄たけびをあげたラナをユピテルたちはキョトンと見た。

「今日は何やら、やる気満々ですね。ラナ様」
ユピテルは、ぱたぱたとラナの周りを飛び回った。

「まあねー。今日の私は一味違う。会議頑張るもんね～」
朝の母の夢は、ラナを後押ししてくれた気がする。

「そうですか、ユピテルめも応援しますよ！」

「うん！」

思わず、えいえいおー！と言って、腕を振り上げたラナを見て、ユピテル達も一緒に「おー！」と腕を上げてくれた。
ラナは嬉しくて、思わず5回同じことを繰り返した。

∞∞∞

魔国城までは、ユピテルの翼で3時間くらいかかる。意外にラナの城と魔国城が近い、というわけではなく、ユピテルのスピードが速いのだ。

魔国城に着くと、衛兵がラナを出迎えた。

「おはようございます、宰相様。相も変わらず、可愛らしい魔力ですな」

少し偉い地位にいる衛兵が、笑顔で嫌味を言ってきたが、今日は全然気にならない。

「いやー、それほどでも～」

ラナは満面の笑みで、答えた。

いつもなら、おどおどして「そうですか？」くらいしか言わないので、その衛兵は驚いたように目を大きくさせた。すぐに、面白くなさそうにして、「会議室にお連れします」とぶっきらぼうにこたえる。

ユピテルとは別れ、会議室に向かうラナを、すれ違う魔族たちは冷たい目で見てきた。

でも、もう気にしない。

『俺は、お前の味方だ』

ラナはエドマンドの言葉を心のなかで繰り返した。

「ラナ・アールヴヘイム様が入られます」
会議室のドアが開けられ、魔王や、宰相のカイルス、それに四武将たちらのそうそうたるメンバーがずらっと円卓に座っている。彼らの巨大な魔力で会議室は満ちていた。

ラナは大きく深呼吸した。
視線は、下げなかった。
「魔王様、皆様、おはようございます。私が最後のようですね。遅くなり申し訳ありません」
確か、会議が始まるにはまだ時間があるはずだが、ラナ以外は皆もう既に集まっていた。

「別に構わないぜ？もう会議は始めていたからな」
魔王様は、ラナを一瞥して言い放った。

（・・・もう既にイビリは始まっていたのかー！）
出鼻をさっそく、くじかれた気分になる。
おそらくラナに伝えた会議の時間は、実際に会議が始まるのより後の時間を教えたのだろう。
「そ、それは良かったです・・・？」
ラナはとほほと心で呟きながら、いつも指定のイスに座った。

？

「次の議題です。最近ラヴァンナ国で、人間が我ら魔族に反抗する動きを見せている、との報告を受けています。このことに対して、至急に対応が必要だとして、議題にあげます」

ラナに構わずカイルスが、機械的に議題を読み上げた。

「まったく、人間の身の程しらずさには、ほとほと呆れます。僕たち魔族に、逆らうなんて」

そう言ったのは、四武将のクラピだ。１５歳くらいの外見の美少年だ。

エドマンドと同様、金髪に蒼い目をして、ラナと同じくらいの年代の少年の為、勇気を振り絞って話しかけたことがあった。あわよくば、友人に、と思っていたラナだったが「何ですか？用が無いなら話しかけないでください」と一蹴されたのは、苦い思い出として、残っている。今でも、そのことを思い出すと、ラナは涙が出てくる。

「人間の分際で生意気ですわ」

可愛らしい外見とは裏腹に、怖いことをいうヴィクトリア。

「まったくねぇ」

そう言って、ディスチラリとラナを意味深に見てきた。

本当に嫌味な奴だ。ラナは内心舌打ちした。

クロノスは黙っているが、他の四武将と意見は同じようだ。

ラナは無言を貫いた。最近こういった話題がよくのぼるようになった。魔族が人間と大きな戦争をしたことは、ない。そうなる前に、ラナの一族がよく止めてきたからだ。
でも、以前ヴィクトリア達が城に来た時のように、ちょくちょく魔族たちが人間を脅かしにいくことはある。
しかも、それが段々と過激になっている気がしてならない。
注意深く、会議の動向を見守っていたとき、魔王様がなんてことはないように言った。

「もはや、我慢の限界だな。

――――――人間を滅ぼそう」

ラナは一瞬息をするのを忘れた。

何て言った？

そんなラナとは逆に、他の者が色めきたった。

「素敵ですわ！今度こそ、人間どもに自分の本当の立ち位置を思い

知らせてあげましょう！」
ヴィクトリアは目をらんらんに輝かせて、言った。
「さすが、魔王様！僕頑張ります！」
クラピは身を乗り出した。
「・・・・」
コクン、とクロノスが頷いた。
「賛成～」
ディスは、ニコニコしながら、手を叩いた。
その様子を見回して、カイルスは頷いた。
「決まりですね。では、人間どもを撲滅する対策について、これから話し・・・」

「ま、待ってください！！！！」
ラナは、カイルスの話を遮った。
なんてことだ。
「人間を滅ぼす、なんて！彼らだって、私たちと変わりません！心があり、生きているのですよ！？考え直してください！」
ラナは今までにないくらいに、反対した。未だかつて、魔王様に反対の意を唱えたことはなかった。怖いからだ。だが、今回はそうは言っていられない。
ラナは、みんなの意見を変えてもらうと、声を荒げた。

「話し合いで、解決しましょう！ここは一つ平和的に――」

「平和的？何を言ってやがる。俺ら魔族が人間に譲歩などする必要なんて、どこにもないぜ」

魔王のソルは、紅の瞳に憤怒の色を宿している。
一気に、抑えられていた魔力が、広まった。弱い魔族であれば、気をうしなっているところだ。それくらいに、発揮された魔力は、すさまじい。

「お前は、いつも甘っちょろいことばかり言うなぁ。前々から、気に食わなかったがここまでとはよ。もう、付き合いっていられるか。老臣たちがどうしてもお前の一族を宰相の地位に就けたままにしろ、というからここまで我慢してやったが、もう無理だ」

ピキッ！

ソルはラナに圧力をかけて押しつぶさん、とばかりに、魔力を当ててきた。今までソルは、ラナに対して、ちょくちょくと皮肉や嫌がらせをしてきたが、ここまで怒ったことはなかった。しかし、今回は違うようだ。

？

「っ！」

ラナは、ソルの気迫に思わず一歩下がった。体が知らず知らずに、ふるえてしまう。他の者たちといえば、まだソルの魔力に耐えられるのか、ラナがソルに一方的に威圧をかけられている様を面白そうに見ている。怯えるラナに、ソルは椅子から立ち上がって、近づいてきた。一歩一歩二人の距離が縮まるごとに、ラナは動悸が早くなっているのを感じた。恐怖で、もはや足は動けない。そして、ついにソルがラナの前まできてしまった。ラナは自分よりも遥かに背が高い、ソルを見上げることになった。

「おいおい。何怯えてんだよ。さっきの威勢だどこ行った？」

ソルは、ニヤニヤとラナを見た。カタカタとふるえるラナ。その様をみて、ますますソルは、皮肉っぽく口角を上げた。

「安心しろよ、『宰相殿』？お前は、殺さないでやる。だが、もうお前はこの魔国城に足を踏み入れることを禁ずる」

それは、事実上の宰相としてのラナの地位の剥奪だった。

ソルは、あえて、ラナの目線まで身をかがめた。ラナの目に、かつて無いくらいに、近くソルの顔が映る。

「すぐに、この魔国城から出て行け。もう、永遠に来るんじゃない」

ソルは、一句一句、丁寧に感じるくらいにゆっくりと、ラナに言い

放った。言葉の内容とは、逆に優しい笑顔の表情をしているのが、かえって恐怖を煽られる。

そのソルの圧倒的な雰囲気に、一瞬ラナは飲まれそうになった。だが、頭の隅でエドマンドたちの笑顔が横切る。ラナは踏みとどまった。腹に力を入れ、ソルを見た。その様子に、おや？とソルは器用に片眉だけを上げてみせた。

ラナは、声が震えないように、大声で話した。

「私はどうなっても、かまいません。しかし、人間を滅ぼすことだけは――」

「くどい！！！！」

ソルの怒鳴り声が、ラナの言葉をすぐ遮る。先ほどの、見せかけの笑顔を一転させ、ソルは、目をギラギラさせ今にもラナを殺そうと、とばかりの怒りの表情だ。実際に、ラナを首を刎ねようとばかりに、手に力が入っているのが、傍でも分かった。

ラナが、負けじとに尚も言い募ろうとしたが、先にソルは声を荒げた。

「衛兵！この者を、部屋から連れ出せ！連行し、従者共々この城からつまみ出せ！」

その一声をきっかけに、門にいた兵たちがわらわらとラナを捕獲しようとラナのところに集まって来た。ラナは捕まっては、意見も言えなくなると必死に抵抗したが、屈強な兵士たちに捕まれ身動きできなくなった。強制的に連行される中、ラナは叫んだ。

「魔王様！どうか考えを改めてください！お願いしますっ！！」

そんなラナをソルは虫けらをみるように、冷たく見つめていた。
「本当は、お前をここで殺してやりてぇ。だが、老臣たちがお前を殺したら、煩そうだからな。まあ、せいぜい惨めに生きてろよ？」
ソルは、そういい残すと、さっと後ろを向いた。もはや、二度と振り返ることなく、歩いていく。ラナは絶望的にソルの後姿を見つめた。宰相という地位を取り上げられたことより、人間を滅ぼそうとするソルたちを止めることができなかったからである。これ以上何を言っても、ソルは取り扱わないだろう。ラナは呆然としたまま、兵士たちに会議室から、引っ張り出された。
そんな様子を、他の魔族たちは、面白そうに、また興味なさそうに見ていた。彼らにとっては、ラナが必死になって、人間を擁護する様は、単に見世物のようにしか感じていなかった。ラナが完全に会議室から出されるのを、見届けると、途端にヴィクトリアはわらった。
「きゃはは！何て様なの！最後の最後まで醜態をさらして、魔族の恥ですわぁ」
「まったく！でも、あいつがいなくなって、清々したよ、僕」
クラピは嬉しそうに、目を輝かせた。目の前で起こったことについて、興奮していたように、嬉々としている。
はしゃぐ二人の様子をチラリと一瞥しただけで、クロノスは目を閉じた。ラナがいてもいなくても、彼にとってはどうでもいいことなのだ。
「でも、からかう奴がいなくて、少し寂しいなぁ」
言葉とは逆に、ディスはニコニコと笑っている。『寂しい』と思っ

ているとは、到底考えられない。灰色の瞳には、冷徹さが垣間見られる。

「また、新しい玩具を見つければいいだろ？」
ソルはディスを呆れたように見た。まあ、どうせすぐに壊れるだろうが。

この会議室にいる者で、ラナを惜しむ者がだれひとりいなかった。

「・・・では、会議にもどります」
もう一人の宰相であるカイルスは、先ほどの騒ぎが無かったかのように、粛々と会議を進めたのだ。

？

∞∞∞

ラナはおとなしく両脇の兵に引きずられていた。回廊は、ラナが引きずられる音と兵士の足音しか聞こえない。魔王のソルがあそこまで怒るとは。どうすれば、考え直してもらえるだろうか。その言葉だけがラナの頭の中を渦巻く。長い回廊を滑りながら、だが、名案は一向に浮かばない。

（また、何か魔王様に申し出たら、絶対に殺される・・・。といって、黙っていたら、人間が殺されちゃうし。どうしよう）

四面楚歌の状態に、泣きそうになる目を必死に、瞬かせた。

「ラナ殿、従者殿がいるお部屋に着きました」

表面上は丁寧だが、全然心のこもっていない兵士の言葉に、また落ち込む。

（そういえば、私宰相クビになっちゃったんだ・・・）

今更、その事実に愕然とした。唯一持っていた地位さえ剥奪されれば、ラナの出来ることは少ない。

ドアが開かれる。ユピテルが多くの兵士がいきなり部屋に入ってきたので、何事かと目を見張った。その中に、両腕を兵士によって拘束されているラナに目を留める。

「ラナ様！？貴様ら、何をする！！」

ユピテルは牙を出し、兵士たちを威嚇した。しかし、３０センチほどの小さい竜がそんなことをしても、威力はたかが知れている。怒るユピテルに、兵士たちは馬鹿にした視線をなげかけた。

「この度、ラナ・スヴァルト様は魔王様のお怒りをかい、宰相の地位を剥奪されました。この魔国城からの一刻も早いお帰りと、二度とこの魔国城の出入りを禁ず、とのお達しです。どうか、お立ち去りください」

「なっ！」

ユピテルは、うな垂れるラナを見た。この城に来る時のやる気に溢れた表情には影が差し、酷い状況の会議だったことを表している。ユピテルはグルルルと唸り声を発し、兵士たちを睨んだ。だが、フッと唸るのをやめ、力なく羽ばたいた。

「相分かった・・・。では、ラナ様をお離しなさい」

「できません。しかと魔国城から出ていただくまで、拘束させていただきます」

「くっ」

ユピテルは兵の態度に文句を言おうとした。だが、ラナはゆっくり首を振った。それを見て、ユピテルは口をつぐんだ。

兵士たちは、黙り込んだ主人と従者を満足そうに見る。

「では、外へお連れしましょう」

勝ち誇るように、兵士たちは言い放った。

∞∞∞

パタパタとユピテルの羽を動かす音だけが響いている。ユピテルは、後ろ足に捕まっているラナをせわしなく見ていた。ラナは城から追い出される時からずっと、俯いたままである。魔国城から出される時の、魔族たちの対応を思い出すと、今でも腹が煮え繰り返る思いだ。

魔族たちは、侮蔑のこもった言葉で、ラナたちを最後まで冷やかしていた。「宰相様～！さようなら。もう会うことはないと思いますがね」「いや、魔王様の処置は素晴らしいですね」などと、もはや宰相ではないラナに表面上も敬う義理もない、というようにだ。兵や様子を見に来た文官・メイドもこぞって、ラナたちをなぶった。自分だけなら、別にどうとも思わない。だが、大切なラナを陥れるのだけは許せなかった。何度も魔族たちを殺そうと思ったが、ラナがユピテルを抱いたまま離さなかったので、出来なかった。主であるラナは、争いを好まない。そう母親から育てられたからだ。この姿勢は、代々スヴァルト・アールヴヘイム家の家訓としてその当主に受け継がれてきたものである。この教訓に生きる主をユピテルは好ましく思っている。おそらく、スヴァルト家に仕える者たちもそうだろう。だが、その主の考えが他の血に飢えた魔族どもに受け入れられるはずもなく、宰相の地位剥奪という今の状況に至った。心の奥底では、このことに安心していた。宰相という役柄に就きながらも、心優しい少女はこの立場で立っているのが辛そうだったからだ。なら、いっそ宰相を辞め、静かに生きていったほうがどんなに良いか。

時刻はまだ、昼間。青々とした空が広がっている。今のラナたちの

状況とは反対に、すがすがしい。無言の二人だったが、ラナはポツリと呟いた。

「ねえ、ユピテル」

「！は、はい」

「私、諦めない」

「へ？」

言葉には、少し臆病な少女のものとは思えないくらい、力強さがある。

「宰相のカイルスさんの城に行って、どうにか魔王様に戦争を止めるよう進言していただくようにお願いする！絶対に、戦争は起こさせない！！」

ラナの黒い瞳には、決然とした意志が伺えた。その様子にユピテルの心が震えた。

（ラナ様は、もう立派な宰相でしたね）

思わず、顔がにやける。

「はい！では、城に戻ったら、カイルス殿に書簡を送りましょう」

「うん！」

追風が、そんな二人を応援するように吹いた。

送った書簡の返事が来たのは、一週間後だった。書簡には淡白な性格のカイルスらしく、端的に詳しく話がしたいから、自分の城にくるように、とだけ記されていた。だが、話を聞いてくれるだけで、ラナにとっては有り難い。いつ来るかだけ知らせれば、いつでも来て構わない、ということだったので、明日にでも伺うと返事を出した。

（さあ、明日が正念場だ！戦争を止める。・・・絶対に負けない！）

ラナは書簡を握り締めた。

？？？

魔国城と同じくらいに、ラナの城、ミーミル城とカイルスの城の間は、距離がある。地図上では、３つの城で、ちょうど三角形を描けるようになっている。

いつものようにユピテルの後ろ足につかまり、カイルスの城へとラナらは向った。何が何でも、カイルスに頼み込み、魔王ソルの意志を変えるよう働きかけてもらう必要がある。もはや、宰相の地位すら失ったラナだ。もう一人の宰相のカイルスしか、頼みの綱は無い。ラナは始終無言で、カイルスの城―ウトガルド城―に向ったのだ。だんだんと、ウトガルド城が見えてくる。

「うわー！すごい立派だ」

ラナの城は、小さいが温かみのあるレンガ造りの城だ。しかし、カイルスの城は、硬い石で造られ誰をも寄せ付けない雰囲気を醸し出し、少しの隙も無いといった感じで、ラナの城とは大違いだ。まるで、カイルスみたいだ、と感嘆しながら、近くなった城を見上げる。城の所々に、兵士が配置されており、魔国城ほどではないが、厳重な警備だ。ラナの兵士が誰もいないミーミル城とは大違いだ。ラナの城では、誰か来たら最初に出会った城の者が対応する、という適当な警備システムだったりする。最弱宰相のラナのもとに来る来客なんて、いないので滅多にないが。

「あそこに降り立ちましょう」

ユピテルの言葉に、示された場所をみると、兵士長だろうか、ガタイがいい魔族の男が佇んでいる。旗を振り、ここに降りろと指示を出している。指示通りの屋上に降り立つと、すぐに「カイルス様がお待ちです」と言われた。ラナは、ゆっくりと頷いた。

∞∞∞

ユピテルの同伴は許されない、と言われたので、一緒にカイルスがいる応接間まで行けなかった。ラナだけ己の城の何倍もある回廊を、兵士に示されるままに、足を動かす。やっと、着いたかと思うと、大きな門が目の前に広がった。

（でかっ！魔国城までじゃないけど、なんでここもこんなに無駄に造りが大きいのかな）

「では、我々はここで失礼致します」

「は、はい」

ラナに挨拶すると、兵士たちはさっさと持ち場に戻っていった。帰りしな、チラリと兵士たちが笑みを浮かべているのが見えた。あまり、気持ちの良いものではない。意味深なものに感じた。

（まあ、馬鹿にされるのはいつものことだし）

どうせ、またラナのことを内心、中傷しているのだろう。そう思って、気持ちを目前の門の向うにいるはずのカイルスに切り替える。目を閉じる。ラナは大きく深呼吸した。そして、ドアを開いた。

「お邪魔します。ラナ・スヴァルト・アールヴヘイムです。この度お会いすることを許していただき、有難うございます」

ラナは挨拶の言葉を言いながら、部屋に入る。お辞儀の仕方・礼儀作法は粗相の無いように、事前にユピテルに鍛えてもらった。一句も間違わずに言え、下げていた頭を上げる。そして、ラナは戸惑いの表情を浮かべた。

「え・・・？」

目の前には宰相のカイルス・・・ではなく、四武将たちがいたからだ。

「あ、あのー、カイルス殿は・・・？」

確かここは、彼の城だったはず。四武将たちはそれぞれの城を持っているが、ここではない。城を間違ったはずは無い。城に掲げられていた旗は、カイルスの一族のもので間違いなかった。
困ったように四武将を見渡すラナを、ヴィクトリアは笑った。

「ほほほ！ラナ宰相様、お久しぶりですわぁ～。あぁ、もう、宰相では無かったのでしたね？」

「は、はい」

躊躇なく、ラナの痛いところをえぐってくる。ヴィクトリアは、紅

くぬった口元を歪める。翼を出しラナの目の前まで、ふぃっと飛んできた。そして、目を合わせる。

「カイルス様はここにはおりませんわ」

「へ・・・？何故です！？約束していたはずですが」

もしかして、すっぽかされたのだろうか。それは困る。せっかく、手紙を宛てて、アポも取ったのに。早く動かないと、戦争が始まってしまう。ラナは焦りを感じた。

「カイルス様は、あなたとのお約束を忘れてはいませんでしたよ？」

ラナの考えを読んだように、ディスは答えた。ラナは目の前のヴィクトリアから視線を外し、彼を見る。人が良さそうに微笑んでいるが、灰色の瞳には、残忍さが見え隠れしていた。

「？どういうことですか？」

「あなたが来られる、ということで、我々にこの場を任せたのです」

「代理、ということですか？」

ラナの質問にディスは、ニィと笑った。残酷な愉悦を含ませて。

「いいえ。

――――――あなたの抹殺の為ですよ」

???

ラナの目が驚愕のゆえに、大きく開かれる。目の前にいたはずのディスが、次の瞬間消えていた。そして、首にひやりと冷たいものを押し当てられる感触がする。

「ですよ？」

ふぅ、と耳に生暖かい息が吹きかけられる。

いつのまにか、ディスがラナの首に刃物を当て、右隣に立っていた。

「！」

ラナは、びくりと体を強張らせた。その様子を楽しむかのように、ディスはクスクスと笑った。

「あなたが、カイルス様と連絡を取ろうとした手紙を受け取ったカイルス様は、すぐに魔王様に報告したのです。結果、魔王の命により、あなたには消えていただくことになりました。あなたは我々の邪魔をしようとしすぎたのですよ。もはや、戦争を止めることは不可能。なのに、それを止めさせようと、ハエのごとく煩く動きまわるあなたは、邪魔者だ」

「・・・では、始めから、ここに招待する時から、図っていたことだと・・・？」

ラナは、ずっと諦めていなかった。きっといつか戦争を止めてみせると。カイルスとの連絡が取れたとき、飛ぶほどに嬉しかった。ここに来る時も、城の皆が緊張するラナを笑顔で送り出してくれた。・・・そのことは無駄で、始めから意味が無かったのか。

「ええ」

ディスは、事実の衝撃を受けて呆然とするラナの喉を、刃物を当てている逆の手で優しく撫でた。そして、首を一気に締め上げる。ラナは息が出来にくくなった。

「っ！」

「まったく、あなたも馬鹿ですよね。おとなしくしていれば、殺されずに済んだかもしれないのに、です」

クラピが、苦しむラナを呆れたように見た。クロノスは、興味なさそうにただ黙って、一部始終を見ている。

「そうだ、良いことを教えてあげますわ。実は、戦争の準備はだいたい整ってますのよ？今戦争を起してもいいくらいに。ここから数キロ離れた場所に四武将の連合軍が駐屯してますの。魔国城でも、城外に多くの兵が戦いに備えて、集められていますわ」

ヴィクトリアが、嬉々とラナの真正面で話し始める。

「な・・・！」

（しっかりと、戦争が起きないようにチェックしていたはずなのに。裏では、もう下準備が着々と進められていたなんて・・・）

ラナは、ヴィクトリアから告げられた言葉に愕然とした。

「そして、もう一つ。あなたを殺した後、魔族から人間に宣戦布告をする予定となっているのですよ。手始めに、あなたの城とあなたが懇意にしている隣領地、ミッドガルドを攻撃することに決まった

のです」

「っかは、なん、て、いったの」

「見せしめですわ？魔族と人間が親しくするなんて、気持ち悪いっ。そんなことを賛成しているあなたの部下も一緒に殺します」

ラナは、目を見張った。脳裏にエドマンドの優しい笑顔が横切った。そして、アリーや、心優しい人々の楽しそうな様子が次々と浮かんでは、消える。お祭りの時に見た、暖かい人間の笑顔も。あれが、消えてしまう？壊されるの？

「どう、して・・かはっ、そんな、かんた、んに、ころす、なんてっ」

途切れ途切れに話すラナを、四武将たちは侮蔑の表情で見る。

「まったく、そんなことをまだ言うのかしら？

———ウザいに決まってるからですわ。弱いものなど生きる価値もない」

ヴィクトリアの言葉に、ラナは己の中の何かがぶちりと切れたのを感じた。体がふるえた。しかし、これは恐怖によってではない。怒りによってだ。ふるえるラナをヴィクトリアたちは怖がっているの

だと思ったらしい。

「あらあら、またこんなにふるえて」

ヴィクトリアは、口に手を当て嘲笑った。

そんな彼女らを見ながら、ラナは昔のことを思い出していた。ラナの母との修行の日のことを。ラナの母は、いつもラナに忍耐強くあれ、と教えた。だが、またその後に続く言葉も。

『でもね、どうしても怒らなくてはいけない時は、――――――

思いっきり、暴れなさいっ！！』

ブワァッ！！！！

ラナから、巨大な魔力が噴出した。

「な、何っ！？」

「キャーーー！！」

強力な魔力に耐え切れず、四武将たちは、ラナから１０メートルほど離れた。そして、ラナを見る。ラナは目を閉じていた。だが、彼女を取り巻く魔力は、今までの脆弱な魔力とは桁違いだ。こんな魔力は見た事無い。

魔力が床や壁に触れるだけで、そこは崩れた。密度の濃い魔力は、触れるだけでも害を及ぼす。

チリチリと肌が焦げるような魔力に、四武将たちは戦慄した。何が起きているのが、分からない。ラナが黒曜石のような瞳を開け、四武将を見た。

???

クロノスは、目の前の現状に驚きを感じずにはいられなかった。無力で最弱と呼ばれていた少女が、今まで見た事の無いような強力な魔力を放っているからだ。少女の表情は放出する魔力によって、服や髪が舞い上がっている為、見えにくい。だが、魔力と共に激しい覇気が、周囲に放たれていて息苦しかった。こんな体験は初めてだ。

（俺は恐怖しているのか・・・？）

まだ、戦っていないのに、勝てる気がしない。本能で分かるのだ。『敵わない』と。逃げたくなる足を必死に理性でとどめる。周りを見ると、ディスたちも同じ様な状況だと分かる。彼らも驚愕したように、目を大きく見開いている。

目の前にいる少女―ラナ・スヴァルト・アールヴヘイム―は、魔族の中で異端の存在だった。魔族が厭い、嫌悪する人間を庇う立場をとっているからだ。この少女の一族が代々そうだったようだが、多くの魔族がその思考を理解できなかった。代々、彼女の一族は、魔族から疎んじられてきたらしい。そんな一族が何故か今まで『宰相』という地位を守り続けてきたのは、魔族たちにとって大きな謎だった。だが、それもラナという少女の代で、終わるかに思われた。それは、彼女自身に原因がある。彼女は、数年前に母親から宰相の地位を継承した。かすかな魔力しか纏わず、また誰に対してもおどおどし怯えていた彼女は、すぐに力がすべての魔族たちの中傷の的となった。いつのまにか、『最弱宰相』とまで陰口を言われるようになっていた。ヴィクトリアたちは彼女に、たびたびちょっかいをかけていたようだったが、クロノス自身がどうでも良かった。そして、

彼女がどうなろうとも、興味もなかった。だから、魔王が彼女の殺害を命じても、何も思わずに頷いた。

だが、どうだ。眼前で起こっている、魔力の竜巻のような現象は。この現状をもたらしているのが、あの弱虫な少女だと、誰が信じるだろうか。しかし、クロノスたちは信じるしかなかった。実際に、それが起きているからだ。唖然と様子を伺っていると、彼女が閉じていた瞳を開いて、自分たちを見るのが分かった。思わず、体に緊張が走る。

ラナはひたとクロノスたちを見ると、ゆっくりと彼らに向って歩き出した。

「どんなに私を愚弄したって、構わなかった」

一歩、彼らに近づく。

「つらかったけど、それは私にも原因があったし。それに、耐え忍べ、ってお母さんにも教わっていたから」

また、一歩。ラナは呟くように、ぽつりぽつりと独り言のように話しながら、向ってくる。黒い瞳は、クロノスたちから離さずに。

「でも」

ひた、と歩みを止める。

ラナは四武将たちを睨んだ。それは、最弱宰相と呼ばれた弱弱しい

ものではなく、獰猛さを含んだ気迫があった。
ただ、魔力が噴出されているだけだというのに、台風の中にいるようだ。

「人間に害をなすのであれば、話は違う！！」

ラナの言葉を同時に、ダンッ！と強い覇気が広まった。

「っ！」
四武将たちは、体に大きな衝撃が走るのを感じた。

「――――容赦はしないっ・・・！」

鋭い視線を投げかけられた。と思ったら、ラナは消えていた。いや、消えたように見えただけだった。気付けば、ラナはディス一瞬での真後ろに回りこんでいるのが見えた。

「ディス！うしろっ―」

クロノスは叫んだが、もはやその時にはディスは、背中に強烈な蹴りを入れられているところだった。ディスは、振り向き受身を取ろうとしたが間に合わず、目を開いたままふっとんだ。

ドーン！！！

ディスが城の壁に衝突した音が響く。

「っぐはっ！」

ディスが、壁に叩きつけられ、口から血を出しながら、膝をつく。壁は大きな亀裂がはいっていた。呆然とクロノスはそれを見た。あのディスが、たったの一撃で大きなダメージを受けている。目を疑った。

「余所見している暇はないよ」

いつのまにか、近くにラナがいた。とっさに魔力で防御をつくる。激しい爆発音が鳴り、彼女が放ってきた渦を巻きながら迫り来る大きな炎が、防御壁にあたり拡散する。しかし、炎の勢いはまったく弱まらない。それどころか、防御壁ごとクロノスを押してきた。

「くっ！」

あまりの強さに、魔族の中でも随一力持ちで頑丈なクロノスさえ、炎を遮るので精一杯だ。

「調子に乗るなっですっ！！」

クラピが、クロノスに攻撃するラナに向って、刃のように威力を持たせた風を撃つ。電光石火な攻撃は、ラナに当たる前に、彼女の魔力によってかき消された。ラナはクラピをちらりと見るだけで、視線をすぐにクロノスに戻す。

「なっ！？僕の風が・・・！」

クラピが一番得意とする風を使った攻めは、あっけなくラナの前で無効とされた。それほどに、彼女の纏う魔力が密度が高くまた、強固なものなのだ、と思い知らされる。その間にもクロノスへの攻撃は止まらず、クロノスの顔には、汗がだくだくと流れていた。そろ

そろ限界が近かった。

「そんな娘に何手こずっているんですの！？私が行きますわ！」
ヴィクトリアは、持っていた日傘兼武器に魔力を込めて、雷を大きなつくる。そして、一気にラナに雷撃した。だが、ラナが放たれた雷に手をかざした途端、雷は攻撃をしかけた本人のヴィクトリアに方向変換して、彼女自身を襲った。

「え・・・」
己がしかけた雷が自分自身にかえってくるとは思わず、ヴィクトリアは呆然と雷を見た。しかも、ヴィクトリアが放った雷より幾分大きくなっている。あまりにもの速さに避ける事もできず、雷撃は彼女に当たった。

「っ、うぐぁあ！！」

「ヴィクトリア！」

クラピは、ただ叫ぶ事しかできない。ラナは周囲に一気に魔力を放ち、クロノスたちはふき飛ばされた。

「うっ！」

「キャー！」

「っ！」

クロノスは、床に転がるも、すぐに起き上がり、臨戦態勢をとる。しかし、まだ先ほど受けた攻撃の影響で、体のあちこちが痛い。ク

ラピを見ると、ふらふらとだが、立ち上がっている。ヴィクトリアもだ。
最初のすぐに終わると思っていた命令は、簡単には済ませそうにない。クロノスは、自分を奮起させラナを見た。
ラナは、部屋の中央で、立ったままだ。あいかわらず、すさまじい魔力を放ち続けている。

「ははっ！君強いねぇ？どうして、隠していたのさ！」

いつのまにか、ディスは立っていた。だがまだ、蹴りを受けたとこが痛むのか、すこし体を引きずっている。しかし、嬉しそうに笑っていた。

「面白い、面白いよ！君！！」
そんなディスを、ラナは冷めたように見ている。しかし、そんなことも気にせずディスは、ラナを喜色満面に見ている。そして、ディスは、己の魔力と血を合わせて、何百という鋭利なナイフを作る。

「さあ、戦おうよ！」
ディスは、普段の優しげな表情を消し、代わりに冷酷な光を瞳に宿し歪んだ笑みで、叫んだ。ラナに向って、一斉にナイフが襲った。
一人では勝てない、と判断したクロノスたちも、同時に己の最大級の攻撃をしかける。四隅からラナを目指して、強力な魔力が急襲される。

ズドォォォオオン！！

とてつもない爆風と爆音が広まった。煙で、部屋は満ちる。巨大な攻撃の嵐に、部屋はめちゃくちゃで、壁や天井はところどころ崩れている。煙で視界が悪くなるが、また徐々に壁などが崩れて外の空

気が入る事で煙が納まる。

？？

（やったか！？）

クロノスは、まだなお煙が渦巻く、ラナがいた場所を慎重に見た。しかし、煙が納まると同時に、円状のシールドがチラリと見えた。そして、強力なシールドがラナを攻撃から守っているのを確認し、愕然とする。

（四武将全員でしかけても、ダメなのか・・・？）

ラナは、貼っていたシールドを消した。

「人間との開戦が近いのなら、早く止める必要がある。あんたらとの戦いは悪いけど、さっさと済まさせてもらう」

淡々とラナは話した。顔は無表情だ。

「こしゃくな！我らを見くびるなっ！」

ヴィクトリアは、顔を般若のように歪め、激怒する。しかし、体は既にボロボロだ。

「確かに、４人一斉に攻撃されたら、めんどくさい。

――――――一人ずつ、倒すか」

ラナは呟くと、正面にいたクラピを見る。クラピは体を強張らせた。その瞬間ラナは、クラピの真向かいにいてクラピの腹を迷わず魔力を込めた拳でなぐっていた。

「ぐはぁっ！」

――ドォオン！！

クラピが壁にぶつかり、もはや城の壁や天井が耐え切れず、崩壊した。壁の固まりが、殴られ気を失っているクラピに容赦なくふりそそぐ。あっというまに、クラピは見えなくなった。

「クラピッ！！」

ヴィクトリアの叫び声だけが響く。

「・・・速さを得意とするあの子が、まったく追いつけないなんてね」

ディスが、ぼそっと呟いた。口元には笑みをつくっているが、目は油断無くラナの動向を隙無く見ている。

それぞれ四武将は、得意な攻撃の系統がある。魔力をもっともその者にとって適したものへ、変換させるのだ。例えば、魔王ソルは、炎を使った攻撃が得意だ。彼の黒い炎は、業火として敵を一瞬にして焼き尽くす。ディスも刀やナイフなどを具現化して、相手を切り刻む。クラピは風を使う攻撃をよく用い、その身動きの早さは魔族1とも言われるほどだった。

――そのクラピが何も出来ず、攻撃を受ける事しかできなかった。
クロノスは、再度認識を改めた。
『ラナという少女は強い』と。
「しょうがない、これは連携で攻撃するしかないようだね」
ディスはクロノスとヴィクトリアに視線を投げかける。二人は了解した、というように頷いた。
ゆらり。ラナがクロノスたちのほうへと体を向ける。
「いくぞっ！！」
3人は一斉に飛び掛った。ディスが大量のナイフをつくり出し、ラナに襲わせる。それにラナが避けると、避けたところをクロノスが強力な蹴りをくらわそうとした。しかし、それすらもラナは寸でのところで、避けた。蹴る対象がいなくなったクロノスの攻撃が床にあたり、床は大きく割れた。
「チッ」
ラナに己の攻撃が回避されたと、気付くとクロノスは舌打ちをした。
「はあああぁぁぁ！！！」
しかし、ヴィクトリアがクロノスの攻撃に間を置かず、雷撃をラナに放った。
ビリィィッ！！

けたたましい音と共に、雷撃が突如現れたバリアによって、阻まれてしまう。3人で攻め立て続けるしかない、と判断しクロノスとディスもまたラナに向かい最大級の魔力をぶつける。

ディスが大きな刀をつくり出し、ラナに向って刀をふるう。しかし、ラナも巨大な鎌をつくり出して応戦した。

カキィンッ！

二つの刃が鋭く音を出しながら、ぶつかる。自然とディスとラナの顔が近くに向かい合うようになった。ディスはにい、とラナに笑う。

「へぇ？武器の扱いも出来るんだ。いいねえ！」

目をランランと輝かせ、己の顔をラナの顔に寄せて話しかけた。ラナは少し眉をひそめただけで返事をしない。ディスがラナに話しかけている間も、二人が刀をふるうのは止まらない。打ち合いの音がキィン！と響く。

ディスとラナが間合いを空けたところを見はかり、クロノスはまた得意の肉弾戦をしかける。魔力を込めた凄まじい破壊力をもつ拳を振るうが、やはり避けられてしまう。攻撃を回避したラナを狙って、遠距離からヴィクトリアが雷撃をぶつけるが、強力なバリアや、機敏な動きでクロノスたちの攻めはすべて完封されてしまう。

（早い・・・。クラピ以上か）

クロノスは、こんな時だが妙な感嘆さえ感じた。魔族の中でも、随一の力をもつクロノスたちでさえ、束になってかからないと、勝負

できない。いや、着実に押されている。ディスは己を忘れてラナに刀をふるっているが、傷は徐々に増えていた。ヴィクトリアも、後方支援で雷撃をぶつけているが、大量の魔力を消費しているため、顔には疲労の色が濃い。クロノスも激しい攻撃に、体に負担がかかっているのを感じている。３人ともラナに受けた攻撃の回復がまだまだだった。

（どうする！？このままでは―）

『負けてしまう』と思った瞬間、クロノスの心を読んだかのようにラナが今まで攻撃を避けていたばかりの動きを変えてきた。己からクロノスたちに攻撃をしかけるようになった。どこにそんな怪力が隠されているのか、ディスの刀をはじきディスが鎌に飛ばされ後退した瞬間、持っていた鎌を消し、ディスに魔力を圧縮したものをぶつけた。

「次は、あなたが消えてもらう」

「ぐはぁああ！」

圧縮された魔力はとてつもない破壊力をもっていたようで、ディスを弾き飛ばした。また、触れるだけでも損壊を与えるほどらしく、ディスの体はボロボロになった。床に叩きつけられたディスは口から大量の血をだし、動かなくなる。

「くっ！」

呆然と見ているわけにもいかなく、攻撃する為、すぐさまクロノスはラナに近づく。後ろからラナに拳をふるおうとした。

バシンッ！

「！？」

なにものも爆砕する威力のある拳が、やすやすとラナの小さな手のひらに受け止められた。自分に背を向けていた少女は、いつのまにか己に体を向けている。今までそんな事は無かった。クロノスは受け止められ己の拳を見て、唖然とする。

「終わりだよ」

その言葉に、はっとした時、腹に衝撃を感じた。殴られたのだ、と気付いた時にはクロノスの意識は消えていた。

???

強固なつくりの城が、今は多くの損壊により、元のつくりが分からないくらいに崩壊している。特に、瓦解が激しい部屋は、魔族でも特に強いとされる四武将たちが瀕死の状態で転がっている。
ラナは、そんな様子を感慨もなく、見つめた。そして、最後の四武将の一人を見る。

「ひっ！」
ラナに見られ、唯一倒されていないヴィクトリアはひきつった声をあげた。といっても、彼女の着ていた服は、焼け焦げたり、破けたりしていて、彼女自身体中に生傷をこさえ、哀れな姿となっている。
そんなヴィクトリアを少し見つめた後、ラナは彼女へ近づくべく一歩一歩とゆっくり歩き出す。

「っ！来ないでっ！！」

ヴィクトリアは悲鳴に近い声で、叫んだ。彼女にとって、このような体験は初めてだった。取り乱し、ただ恐怖に怯えることは。ラナが近づくごとに奥歯がガチガチとふるえ、ラナの発する膨大な魔力に失神しそうだ。だが、それは恐怖が先に立ち、気を失うことさえ許されない。もはや、ヴィクトリアは立っていることも出来ず、すとん、と腰が抜けたように尻餅をつく。動きたいのに、動けない。

ザッ

また、ヴィクトリアに一歩ラナが近づく。
無機質な黒い瞳の視線が、ヴィクトリアを捉えて離さない。

「あなたはどうしたの？」

「・・・ぇ？」

ヴィクトリアは、静かな問いかけに思わずラナを凝視する。ラナは淡々と彼女を見つめ返す。

「あなたが人間を襲った時、あなたはどうしたの？」

「・・・あ」

上手く話せない。ヴィクトリアは頭の隅で、己が人間を襲撃したときを思い出した。逃げ惑う人間を『弱い、脆弱だ』と言いながら笑って襲った。己の放つ攻撃で、面白いように人間が倒されるのが楽しかった。人間が命乞いをした時も、容赦はしなかった。その姿を、薄汚いと罵ったりもした。

ザッ。また一歩近づく。もはや、二人の間は数歩の距離だ。

「た、助けて・・・。許して！」

いつのまにか、己の目から涙が出ていた。体全体がふるえる。いつか見た人間と自分は同じことをしている、とヴィクトリア自身ぼんやりと感じていた。

「人間が、助けて欲しい、と言ったときあなたは攻撃を止めた？

――止めなかったでしょう？」

「っ！」

座り込むヴィクトリアの上に、ラナの影がおちる。ラナはヴィクトリアを覗き込むように、かがんだ。
もう、ラナはヴィクトリアの目の前まで、来た。

「だから、私も止めない」
ラナはおもむろに魔力で、鎌を作り出す。彼女の背よりも大きいそれをやすやすと持った。ヴィクトリアは瞳に絶望の色をにじませて、ラナを見上げる。

「――手加減はしない・・・！」

鎌がヴィクトリアに向って、情け容赦なく振り落とされる。
鋭い音が、辺りに響いた。

???

炎があちこちでくすぶり、煙が舞い、壁や屋根が損壊している広間で、ラナは床の一点を見つめて難しい表情をしている。何か考え込んでいた。

「ラナ様」

ぱたぱたと羽をはばたかせ、ユピテルはラナの目の前まで来た。ラナの目線に合わせ、飛ぶ。

「久しぶりに、派手にやりましたね。お怪我は？」

ユピテルはラナの周りを飛び回り、傷は無いか見てまわる。そして、倒れている四武将たちを見た。

「ない」

「それは良かった。・・・まあ、ラナ様が本気になれば、あの者たちがラナ様に敵うはずないですもんね」

「それはそうと、ユピテル」

「はい」

「城の者たちは？」

「あなたが本来の魔力を放出したのですよ？ラナ様の魔力に当てられて、全員意識などとうに失ってますよ。回復の時間もだいぶかかりそうです」

「そう・・・」
ユピテルが少し呆れたように言うと、ラナは小さく相槌をうった。
「ユピテル、魔王が人間を滅ぼすべく、戦闘の準備をほぼ済ませてしまったみたい」
「あー、やっぱり」
あの血の気の盛んな魔王だ。やる気マンマンで、戦いに備えているに違いない。ユピテルは、はぁ、とため息をついた。
（馬鹿な王だ。せっかくラナ様が我慢していたのに）
もはや、誰もラナ様を止められない。
「四武将の軍が、ここから少し離れたところに駐屯していて、魔王軍も魔国城の側に集まっている、ってさっき聞いた。ユピテルは、今から言う命令を至急シェリーたちに知らせて」
「――命令の内容は？」
ユピテルはすぐに、さっきまでのおちゃらけた空気を引っ込めた。黒い瞳が、冷たく光る。
「シェリーたち城の者は、四武将の軍の対処に当たること」
「はい」
「そして、ユピテルにも魔王軍の殲滅を命ずる」
ユピテルは竜独自の鋭い歯をつきだして笑った。小さな竜から、妙な圧力が放たれた。

「承知致しました」
声色には、少しの高揚感が感じられる。ユピテルもまたラナの魔力に当てられ、本来の戦闘に対する興奮が蘇らせられていた。
「ラナ様はいかが致します？」
「魔国城へ向う」
「お一人で？」
「うん」
ラナはユピテルと話している間、ずっと壊れた壁から見える外を見ていた。その視線がいく方向の先には、魔国城がある。普段なら、移動手段は、ユピテルの羽につかまるしかなかった。瞬間移動のテレポートは、意外に魔力をくう。魔力を開放しないラナであれば、到底無理な手段だ。しかし、今は違う。
「畏まりました」
ユピテルは恭しく、礼をした。
「それにしても――――」
白い竜は、ラナから離れ、広間をぐるりと飛び回った。
「彼らを殺さないのですね」

四武将たちはかろうじてであるが、生きていた。おそらく、目が覚めるのはだいぶ後ではあり、瀕死の状態に間違いはないが、急所をわずかに外されてある。ユピテルの質問に、ラナは少し気まずそうに答えた。

「目的は、魔国の魔族の殲滅ではないし。人間への侵攻の阻止だから。・・・ユピテルたちも兵は殺しちゃ駄目だよ？」

「はいはい」

まったく、我が主は、とユピテルは苦笑した。ラナはそんなユピテルを怒ったように見て、消えた。テレポートで瞬間移動したのだ。そんな主の動向を見届けると、ユピテルもまた消えた。ウトガルド城に、しん、とした静けさが訪れた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9900y/

最弱宰相は奔走する

2011年12月14日23時51分発行